

〔石田先生事蹟〕人へつかはし給ふ包銀には、のしを付け、包錢は水引をかけてのしを付給へり、  
〔蓮歩色葉集見〕水引

〔雍州府志<sup>七</sup>土産〕水引 元城殿之所製爲始近世兼康町八木某多造之、如今所々製之、其式杉原紙、或奉書紙隨紙之長短、幅一寸許直切之、以手指捻之、其長一尺餘、而暫浸米泔水、取起之、以巾絞引之、故謂水引、日乾而後半塗臘脂、是謂赤白水引、半白所爲本、半赤所爲末、以是括短冊結、玄猪、其外括諸物、至近世則金箔、臘脂、鬱金汁、藍汁、段々彩之、而以箔細紙、每十條束之、是謂一把、至百把或三百把爲婦人贊、其剛堪結束諸物、又鳥子紙一枚、段々彩各色、細切不及捻而用之、是謂平水引、是又近世之製也、

〔三内口決〕一水引結物事

於禁中者、多分被用紙捻候、但懷紙、短冊等ハ、白紅之水引、以一筋結之候、女房髮之水引、同前候、當時段々水引一向不用之候、半白ク、半紅ナル水引、白紅ト號シテ外様ニ用之、

結様事 中ニ可見用ノアルハ片鑑也、細々開見マシキ物ハ毛呂和那也、

又薄様ノ水引ハ、其紙ヲ捻候テ、面ト懷胞ト中倍トノ五色ヲ捻テ、五筋宛續之、十文字ニカラゲテ、裏ニテ、留之片鑑ナリ、

〔貞丈雜記<sup>九</sup>進物〕一紅白水引にて包物を結事、紅白の色左右定なし、然れども結ばざる以前に白を左にし、紅を右にすべし、白は五色の本也、左は陽にて貴き方なれば、白を左になすべし、

〔宗五、大草紙上〕折紙調候様の事

一先折紙のたけの高きは狼藉也、公方様へは、常々公家門跡、大名衆は備中紙、小高檀紙を一重二に折て御用候、御供衆同前、大かたの人は小引合、杉原など被用候、公方様を禁裏様へ御進上之目錄は、大高檀紙一枚にて候、管領の御母を公方様へ參候折紙、大高檀紙一枚にて候、又細川殿を進